

## バッファロー、ポスドク生活

医歯学総合病院・助手  
(噛み合わせ診療科 歯周病診療室) 両 角 俊 哉

2004年6月から2006年3月までの1年10ヶ月間、ニューヨーク州立大学バッファロー校歯学部口腔生物学講座へポスドク（博士研究員）として赴任しておりました。帰国後すでに半年近くが経ち、こちらの生活や仕事にも慣れてきた最近、やけにバッファローでの生活を懐かしく思い出します。ふと目を閉じると、ラボでよく流れていたボストン・ポップスのメロディーや黄昏時のエリー湖上に広がる眩しいばかりの夕陽、真冬のハード・フリーズによる凍てつくような頬の痛みなど、数々の光景や思い出が蘇ってきます。そして、今にもドアの向こうからアーニーがお得意の口笛を吹きながら、“Hey, Toshi!”と入ってくるような錯覚さえ……などという思い出に浸れるのもほんの一瞬、今は診療や研究に追われる毎日で、昨日のこのように思い出することもあれば、遠い過去の出来事のように感じる時もあります。

### 留学への思い

私は大学院修了後の1年間は研究生として、その後の1年は医員として日中は外来で忙しくしていたため、研究時間には平日の夕方以降や休日を当てていました。私は臨床に対してもその面白さから意欲的に取り組んでおりましたが、一方で実験のためのまとまった時間がとれないことにある種のもどかしさを感じていました。そして遂には、アメリカで思う存分に研究をやってみたいという気持ちを抑えることができず、サンフランシスコで開催されていた米国歯周病学会において、我々の講座と共同研究をしていたNY州立大学バッファロー校のDr. Gencoに半ば直訴のように受け入れをお願いしました。ジェンコ教授は口腔生物学講座のチェアー（当時）であり、Journal of Periodontologyのエディターも務める



歯周病学界における世界的重鎮です。その後、吉江教授に非常に強いプッシュをして頂いたおかげで、ジェンコ教授からProf. De Nardinを紹介され、その半年後に渡米しました。

### バッファロー・シティ

アメリカ北東部に位置するバッファロー市はNYシティから西へ飛行機で1時間程の距離にあり、それゆえ同じNY州とはいっても新潟一大阪間ぐらい離れています。五大湖の1つであるエリー湖の東端に位置し、それとオンタリオ湖とを結ぶナイアガラ・リバーが市中を流れる自然豊かな街です。緯度は北海道の帯広や釧路とほぼ同じであり、冬はとてつもないのですが、梅雨がない6月はまさにベストシーズンです。公園や街路の木々は緑鮮やかに燃え盛り、ナイアガラの滝へつながる川の流れるには躍動感が溢れています。私が赴任した5月末はその『短い最高の季節』のスタートであり、人々のみならず昆虫や建物までもが生き生きとしているかのようで、感激の内に新生活が始まったことを思い出します。

また、この地域はカナダとの国境の街でもあり、車でナイアガラの滝まで20分、トロントまでへは



写真1 ナイアガラの滝（正確には2つある内のカナダ滝）。

2時間と一大観光拠点地でもあります。その名の通り野牛=バッファローは市のシンボルであり、街路や公的機関内などあらゆる場所で多彩なバッファロー像を目にすることができます。かつては米英戦争の拠点もしくはカナダ貿易の基地として栄え、20世紀初頭は全米でも10の指に入る主要都市でしたが、現在は人口約30万人の小都市に落ち着いています。しかしながら、日本やアメリカの大都市に比べれば物価は安く、緑も多く、腰を据えて研究するには中々良い環境でした。

## UB

前身の私立医科大学時から数えると150年以上の歴史を持つこの大学は、略して University at Buffalo、地元では親しみを込めて UB と呼ばれています。ノースとサウスの2つのキャンパスがあり、歯学部は医学部や看護学部、公衆衛生



写真3 キャンパス内の校舎。



写真2 オベ着を着た矯正中のバッファロー。

健康学部、建築学部などと共にサウス・キャンパス内にあります。近代的なノースに対して、サウス・キャンパスを歩いて目立つのは一面に広がる芝生と木々よる豊かな緑であり、その中に佇むように存在するクラシックな石造りの校舎とパティオはいかにも東海岸といった雰囲気です（実際にはもうちょっと内陸ですが）。しかし、建物の内部は一部の装飾画を残していずれも最新の研究設備を有する姿に改装されており、新旧の共存という精神がそこに表れているように思えます。

## ラボ

そのサウス・キャンパスの住人である Department of Oral Biology は約20のラボから成る大講座の呼称です。その内の約8割は



写真4 我々の講座が入居するフォスター・ホール。

微生物学を専門としており、良く言えば「方向性が定まった」、悪く言えば「非常に偏った」編成となっています。私が属していたラボはその中でも少数派の分子免疫学・炎症班 (Molecular Immunology and Inflammation Group) に属しており、私は血液凝固因子プロモーター領域遺伝子多型の機能解析等に取り組んでいました。

我々のラボはボスとポスドク2名、大学院生1名、テクニシャン1名の計5名という小世帯でした。ちなみにボスであるアーネスト・ディ・ナーディン教授 (通称アーニー) は高校生の時に移住してきた陽気なイタリア人であり、ポスドクは中国人のミーシャンと日本人の私、院生であるトビアスはドイツ人、テクニシャンのリンダはアメリカ人と、ご多分に漏れず多国籍ラボでした。ちなみに私と入れ違いの時期に PhD を取得してラボを出たエズラはトルコ人であり、その前にはギリシャ人のジョージがポスドクとして在籍していました。さらには隣ラボのボス、アシュールはインド人です。中学の社会科で習った『アメリカにおける人種の垣塙 (るつぼ)』とはこれなのかと肌身をもって実感しました。

UB では横のつながり強さを実感することが多く、それは学部や講座、ラボを問いませんでした。ラボ同士も非常に良好な関係が築かれており、隔週で開かれる講座のリサーチ・セミナーやジャーナル・クラブではいつも盛んに議論が行われています。大学院生と教授が対等にディスカッションするのはいつもの光景ですが、それは即

ちそこまで勉強していることの表れでもあり、自らの院生時代と比べては反省しきりでした。また、大型かつ高額な実験機器は大学もしくは講座として購入し各ラボに仮置きしている形なので、他学部のラボであっても勝手知ったる他人の家のように協力・共用し合い、思いがけないところで交流が生まれることもあり、楽しくかつハードに日々仕事を進めていました。

## 悪戦苦闘

それでも、その実験も軌道に乗るまでが大変でした。到着して最初のリサーチ・ミーティングでアーニーから新しいプロジェクトの説明を受けた時のこと。やはりというか、予想以上に言っていることがうまく聞き取れませんでした。それでも何となく概要はわかったので、とりあえず

“I understood your explanation.”  
と答えたら、アーニーが心配そうな顔で隣の人に  
“Maybe, he doesn't understand.”  
と、しっかり見抜かれていました。

また、細胞の成長をコントロールするつもりが逆に自らの生活が振り回されてしまい、明け方までラボに残るか、一旦アパートに戻って早起きするかしばしば迷ったものです。しかし、アパートで一旦寝るとなかなか起きられないことがすぐに判明し、世界中の院生達がやっているようにサマーベッドみたいなものを実験室に持ち込んで、仮眠を取ることにしました。しかしこれがまた何とというか、寝つけが悪いうえに眠りも浅く、冷凍庫の音が気になって翌日はボーっとして仕事はか

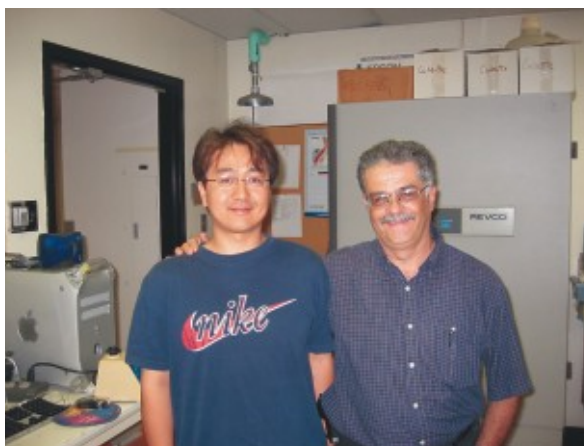


写真5 渡米したばかりの初々しい私とアーニー。



写真6 近くの公園で講座の仲間達とピクニック。

どりませんでした。そうこうしているうちに、細胞の方もこちらの気持ちを汲み取ってくれたのか（そんな訳ありませんが）、成長が安定し、計画的に実験を進められるようになってきました。

月に一度のリサーチ・ミーティングも頭の痛い問題でした。『いつ来て、いつ帰ってもいい。データさえ出せば』という各々のやり方を尊重するアーニーの方針は、ともすれば強いプレッシャーでもありました。計画的に進めようとしても、何かしらによりどうしても遅れてしまうもの。直前の一週間は「やばい、やばい」が口癖でした。そして、どうしてもいいデータが無いときの取っておきの手段。それは、当日朝からオフィスのドアを開放しておき、彼の生まれ故郷の音楽であるカンツォーネを大音声でかけておくことです。アーニーが廊下を歩くときはいつも口笛を吹いており、その音色によりその日の機嫌がわかります。そして午前10時半、私宛の郵便物を持って彼が私のオフィスを訪ねる頃、遠くから聞こえてきたホイッスリングが突然曲を変え、しかもいつもよりワンオクターブ高くなっています。そして、部屋に入るなり大きな声で、

“Toshi, It's Italian !! Do you like Italian music ?”

“Of course.”  
これにて作戦終了。

## スポーツ

研究は体力勝負とばかりに、オフ日は特に仕事



写真7 名物料理バッファロー・ウイング。あまりの辛さに涙が出てきます。

がなければ外に出てスポーツに励んでいました。とりわけ、春から秋にかけての日曜日は、バッファローで一番の規模を誇るデラウェア・パークでサッカーをしていました。動物園や美術館、ゴルフコースまであるこの公園には4面のサッカーコートがありましたが、アメリカではマイナーなスポーツであるせいかいつも空いていました。しかも、今思えば外国人や他所からの移住者が多かったような気がします。

どこかのチームやサークルに所属していた訳ではなく、週末の夕方5時半頃になると近辺に住むサッカー好きの人達がめいめい集まり、その人数に応じてチーム分けをしてゲームをしていました。人数が少なければ2チームで通常通りに、もし3チームであれば1点取るごとに負けたチームが入れ替わるといったふうにして大体2~3時間は続いていました。サッカーが好きであれば性別・年齢に関係なく、誰でもいつからでも途中参加可能で、もちろん帰りたいたい時には「バイ」と言って勝手に帰ります。私はこのイージーな雰囲気大好きで、中・高校生や年齢不詳のオジサン達と汗をかきながら緑の芝生を駆け巡っていました。ダウントウンに100年以上の歴史を誇るRPCI (Roswell Park Cancer Institute)の大学院生やポスドク達との交流が生まれたのもここでした。そして、心地よい微風を浴びながら芝生の上に大の字になり、真っ青な空を縦横無尽に交わる飛行機雲を眺めながら遠い故郷に思いを馳せたり、草の色の微妙な変化に季節の変



写真8 吹雪のロードレースで完走直後。

化を感じたりしたものでした。

学内外のロードレースにも積極的に参加しました。11月末のサンクスギビング・デイには隣接するトナワンダ市からデラウェア・アベニューをダウンタウンまで上るレース（ターキー・トロット）に出たのですが、途中で猛吹雪になり、白い息を吐きながらそれでもなんとか完走しました。コンベンション・センターでちょっとしたパーティー形式の表彰式が開かれたのですが、その時に飲んだ熱々のホットチョコレートの味は忘れられません。これら以外にも、遠心機を回している間の同僚とのテニス、中国人留学生とのバドミントン対決など、日本にいた時よりも随分体を動かしていました。私に限らず多くの市民が懸命にスポーツに励んでいたように思えます。もしかしたら、長かった冬からの解放感と、短い夏への惜別の思いが本能的にそうさせているのかもしれませんが。

## 音楽、建築

プライベートが充実せねば良い仕事はできぬと自らに言い聞かせ、NY シティやクリーブランド、ピッツバーグ、トロントなど近辺各地のオーケストラへもよく聴きに行きました。地元のバッファロー・フィルに至っては、車で10分少々距離であったため、週末PCRをかけている間にちょっと行ってきます、という具合。他にも、友人達と片道7時間かけて行ったボストン交響楽団のタングルウッド音楽祭、かねてより大ファンであったエレヌ・グリモーのリサイタル、クリスマ



写真9 ピアニストのエレーヌ・グリモーと。もっといい服着てくれば良かったと後悔しながら。

ス近くにクリーブランドで聴いた2時間30分にもわたるヘンデルのメサイア等々、忙しい中でも何とか時間を捻出して出かけ、明日への活力を注入しておりました。

また、かねてより建築に興味があった私にとって、NY シティの多彩な美術館やクライスラービルをはじめとするアール・デコ様式、近代の巨匠達による高層建築群など、今まで本や写真でしか知り得なかった建築物をこの目で見て巡ることができたのは嬉しい限りで、分野は違えど非常に感銘や刺激を受けました。ピッツバーグ郊外の落水荘に代表されるフランク・ロイド・ライトによる個人住宅はバッファロー近辺にもいくつかあり、建築士の友人と週末によく巡り歩いたものです。帰国前には遂に、ライトとその弟子達の住まい兼仕事場の1つであるアリゾナのタリアセン・ウエストへも行っていました。帰国したら読もうと、その都度に衝動買いしてしまった多数の書籍や写真集は現在、自宅の本棚で熟成されています。そろそろ読み時だと思うのですが……。

## おわりに

私にとって、生まれて初めての海外旅行は大学院3年目に行った国際学会でした。同年代の人たちと比べればやや遅い方かもしれませんが。それがまさか、その数年後にアメリカに住むようになるとは、人生とはわからないものだなとつくづく思います。アメリカでの生活は、見るもの、触れるもの全てが刺激的かつ新鮮であり、子供時分のよ



写真10 このようなライトの小作品が近辺に多数あります。もちろん中にも入れます。

うに好奇心がくすぐられる毎日でした。同時に、ダイナミズム溢れるあの環境に身を置いて研究に集中できる機会を歯科医師としてあの時期に獲得できたことは幸福だったとつくづく感じます。

バッファローでは実験技術のみならず、研究というものに対する姿勢、多彩なラボやボスの在り方など多くのことを学ぶことができました。また、多くの良き友人や同僚、ボスに恵まれたことは幸運としか言いようがありません。さらには、多様

な価値観がぶつかり合うアメリカという国で、客観的に自分を見つめ直すという機会は非常に得がたいものでした。今後は、バッファローで学び得たことをいかに継続、発展させるか。とりわけ、どのように臨床へ応用させていくかがこの先の課題となりそうです（今は目の前のことで手一杯ですが……）。

本当に行ってよかった！ その一言に尽きます。



写真11 帰国前日。左からリンダ、アーニー、私。アメリカン・スマイルも板についています？



写真12 講座のチーズ&ワインパーティーで。ちなみに、この中で日本人は私だけです。



写真13 2004年10月のとある午後。リサーチ・グループの仲間達と。